

露越遺跡第16次、第17次発掘調査概要

1. 調査の経緯と経過

第1節 (第16次調査)

当発掘調査は、周知の埋蔵文化財である露越遺跡の範囲内において、宅地造成が計画されたことに伴うものである。造成の計画段階で、町と開発事業者が協議を実施した後、埋蔵文化財に関しての協定書を交わし、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業地内から遺構・遺物が確認されたため、事業地の道路・排水の新設部分については、本調査を実施することとし、一部立会調査を実施することとした。本調査の実施後、工事の進捗に伴って立会調査を実施する予定であったが、工事が延期となっており、立会調査を実施していないため、本概要報告には掲載していない。

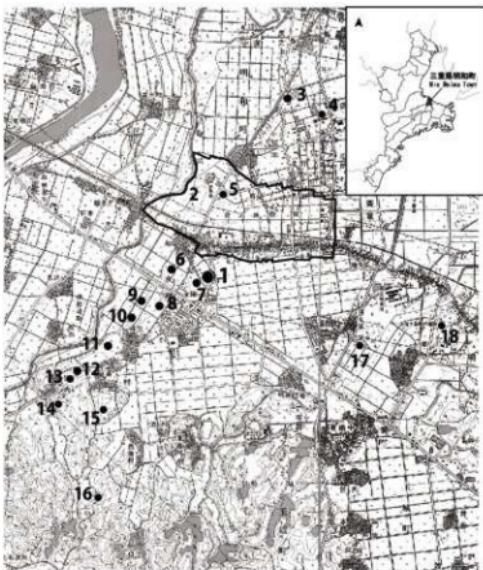
第2節 (第17次調査)

当発掘調査は、同じく露越遺跡の範囲内において、幼稚園建設が計画されたことに伴うものである。本地点については、平成20年度に幼稚園の駐車場造成に先立って明和町が試掘調査を実施しており、溝などの遺構や遺物が確認されていた。そのため、試掘調査は実施せず、建物基礎によって遺跡がやむを得ず破壊される範囲について、工事に先立って発掘調査を実施することとした。

2. 位置と環境

第1節 地理的環境 位置と地形

露越遺跡は、三重県多気郡明和町大字竹川字露越、南裏、野口と大字斎宮字木葉山に位置している遺物包含地で、南北約400m、東西約420mに及んでいる。遺跡は、かつての柳田川本流とされる祓川と宮川の下流域に挟まれた標高13m前後の洪積台地である明野台地西部に位置する。遺跡の南部にある玉城丘陵・大仏山丘陵を起点に、北に向かって段丘高位面、段丘中位面と下降していくが、露越遺跡は斎宮段丘面と呼ばれる中位面に位置する。遺跡西部の標高が約14m、遺跡東部の標高が約13mで、南西から北東に向かって緩やかに傾斜している。一方、遺跡の東側には水田が広がり、標高が約12m前後と、遺跡の立地する標高よりも1mほど低くなっている。段丘中位面の中でも南西から北東に向かう谷状地形が埋没し現在は氾濫平野となっている。氾濫平野部分には小字名で「上六ノ坪」、「下六ノ坪」などの地名が残り、昭和50年代の圃場整備以前には真東から4度北に振った方位で、条理型地割が確認されていた。



第1図 周辺の主要遺跡地図 (国土地理院1:50000「松阪」から)

- 1: 露越遺跡、2: 宏跡茶室跡、3: 板本古墳群、4: 東坂外古墳群、5: 寒山古墳群、6: 金剛坂遺跡、7: 宇田遺跡、8: 旗ノ口古墳群、9: 寺組内遺跡、10: 神殿遺跡、11: 繩糸遺跡、12: コドノ遺跡、13: 神前山1号墳、14: 大塚1号墳、15: 天王山19号墳、16: 高塚1号墳、17: 北野遺跡、18: 史跡水池土器製作遺跡

第2節 歴史的環境

露越遺跡（1）は、当地域の中心的な古代遺跡である史跡斎宮跡（2）の南側に隣接して所在している。町内では、古代に属する遺跡が多数見つかっているが、特に斎王制度が確立てくる奈良時代になると、斎宮跡周辺で集落跡が多く確認されるようになる。史跡斎宮跡は伊勢神宮に仕えた皇女が赴任した官衛遺跡であり、多種多様な遺構・遺物が確認されている。また、斎宮跡に関連する遺跡として史跡水池土器製作遺跡（18）があり、土師器生産に関わる遺構がまとまって確認されている。特に土師器を焼成するための遺構は、土師器焼成坑と呼ばれ、北野遺跡をはじめ古代有爾郷に比定される町南部の各遺跡で確認されている。これらの遺跡で焼成された土師器は、斎宮や伊勢神宮の儀式に欠かせないものだったと考えられる。

周辺には、奈良時代の掘立柱建物が見つかった宇田遺跡（7）や、同じく奈良時代の掘立柱建物、竪穴建物が見つかり、美濃國刻印須恵器も表採された金剛坂遺跡（6）が位置している。これらの遺跡は古代において、一連の遺跡群のような様相を呈している。また、露越遺跡が所在する台地西側の沖積部に目を転じると、自然堤防上に寺垣内遺跡（9）や神殿遺跡（10）などが分布している。これらの遺跡からも古墳時代から奈良時代に属する竪穴建物や掘立柱建物が多数見つかっており、史跡斎宮跡の解明のためには周辺遺跡の関連性にも注意が必要で、調査の進展が期待されている。

第3節 過去の周辺調査

露越遺跡では、過去に明和町や三重県が主体となって発掘調査が実施されてきた。【表1】

明和町の町事業に関連して実施した第1～1次、第3次、第4次では、後世の削平などにより明確な遺構の確認ができていない。

一方、三重県が実施した圃場整備などは、遺跡の北部で実施され、遺構が確認されている。第1～2次調査では、奈良時代の土坑、平安時代の井戸や溝、土坑、室町時代以降の溝が確認されている。第10次調査では、8世紀代と12世紀代の溝が確認されている。第15次調査では、13世紀代の溝が確認され、隣接する斎宮跡第76～9次調査では平安時代頃の溝や土坑が確認されている。

ただし、既往の調査は線的なものが多く、史跡斎宮跡の南側の様相がわかるまでのものではなかった。今回の第16次調査および第17次調査は、露越遺跡において面的に調査を実施したもので、貴重な調査成果を得ることができた。

調査 調査 次元	調査 年度	西暦	調査原因	調査	備考
1-1	S54	1979	斎宮幼稚園建設	試掘	
1-2	S54	1979	県営圃場整備事業	本調査	県調査
2	S63	1988	宅地造成	本調査	史跡斎宮跡 第76～9次
3	H4	1992	コミュニティーセンター 整備事業	試掘	
4	H20	2008	幼稚園駐車場造成	試掘	
7	H27	2015	高度水利機能確保 基盤整備事業	範囲確認	県調査
10	H28	2016	高度水利機能確保 基盤整備事業	本調査	県調査
14	R2	2020	宅地造成	試掘	
15	R2	2020	歴まち事業	本調査	史跡斎宮跡 第198～5次
16	R3	2021	宅地造成	本調査	
17	R3	2021	幼稚園建設	本調査	

表1 露越遺跡における発掘調査一覧表 ※記載のない次数は個人住宅での対応



第2図 露越遺跡周辺図 (1:5000)

＜第16次調査＞

【調査主体】：明和町斎宮跡・文化観光課文化財係

【調査期間】：試掘調査 令和3年（2021）9月13日～9月27日 【調査面積】：175 m²

本調査 令和3年（2021）10月11日～令和4年（2022）2月15日 【調査面積】：1,100 m²

3. 遺構

第1節 調査前の状況と調査区の設定

調査地の標高は14m前後で、試掘調査を行う直前まで、住宅やその庭として使用されており、遺構面がどの程度残っているか不明な状況であった。そのため、試掘調査のトレーニングを3本設定し、北から1～3トレーニングとして調査を実施した。後述する遺構、遺物が確認されたため、本調査に切り替え、3トレーニングについては、本調査と同位置となつたため、まとめて調査を実施した。本調査については、宅地造成の道路建設予定部分を中心に行うこととして調査区を設定した。

第2節 遺構

調査は重機による表土の除却を行い、現況の地表面から0.3～0.7m掘削したところを遺構検出面とした。遺構検出面は調査区西側が最も高く、X=162,480、Y=55,820付近で標高14.03m、調査区南東が最も低く、X=162,520、Y=55,900付近で標高13.1mであり、およそ西から東に緩やかに降る傾斜となっている。検出面の地山も異なっており、Y=55,820付近から西側は、10YR7/6 明黄褐色シルトで、周辺でよく確認される地山であるのに対して、東側は、2.5Y3/2 黒褐色シルトで、全体として地山の色が暗い色であった。標高値が低いために生じた2次堆積層であろう。

調査の結果、奈良時代の竪穴建物5棟、掘立柱建物3棟や中世の溝などを確認した。本概要では、主に奈良時代の遺構の主要なものを中心に報告することとした。

竪穴建物1

本調査区中央部に位置し、北西と南側の一部が後世の搅乱により破壊されており、北東側の一部が調査区外に延びている。N35度Eで、東西長は3.1m、隅丸方形を呈する。確認した深さは検出面から0.1～0.2mで南東側にカマド痕跡がある。カマドについては、周辺に若干の被熱面が確認されたが、ほとんど痕跡を留めていなかった。主柱穴については、中央にピットが確認された以外は確認されなかった。竪穴建物底部では、約4cmの貼床があり、一度掘りくぼめて土を入れ、固く叩き締めている状況であった。また、貼床を除去してから主柱穴を再確認したが、確認はされなかった。

遺物については、出土数は多くないが、奈良時代後期に属すると考えられる。

竪穴建物2

本調査区中央部に位置し、東側の一部が他の遺構により破壊されている。N14度Eで、東西に長軸を持ち、東西長は約2.8m、隅丸長方形を呈する。確認した深さは検出面から0.1～0.2mでカマドは確認されない。カマドについては、埋土中に若干の焼土片が確認されているので、削平されている東側に存した可能性がある。主柱穴については、中央と南側にピットが確認された以外は確認されなかった。竪穴建物底部では、南西部を除いて約4cmの貼床があり、一度掘りくぼめて土を入れ、固く叩き締めている状況であった。また、貼床を除去してから主柱穴を再確認したが、確認はされなかった。

遺物については、出土数は多くないが、奈良時代後期に属すると考えられる。

竪穴建物3

本調査区中央部に位置し、南側の一部が調査区外に延びている。N11度Eで、南北に長軸を持ち、南北長は約2.6m以上で隅丸長方形を呈する。確認した深さは検出面から0.3mで、北側に床面よりも約5cm高い棚状のテラ



Y=55,820

X=-162,460

Y=55,840

竪穴建物 4

掘立柱建物 3

溝 2

土坑 1

掘立柱建物 1

溝 1

溝 3

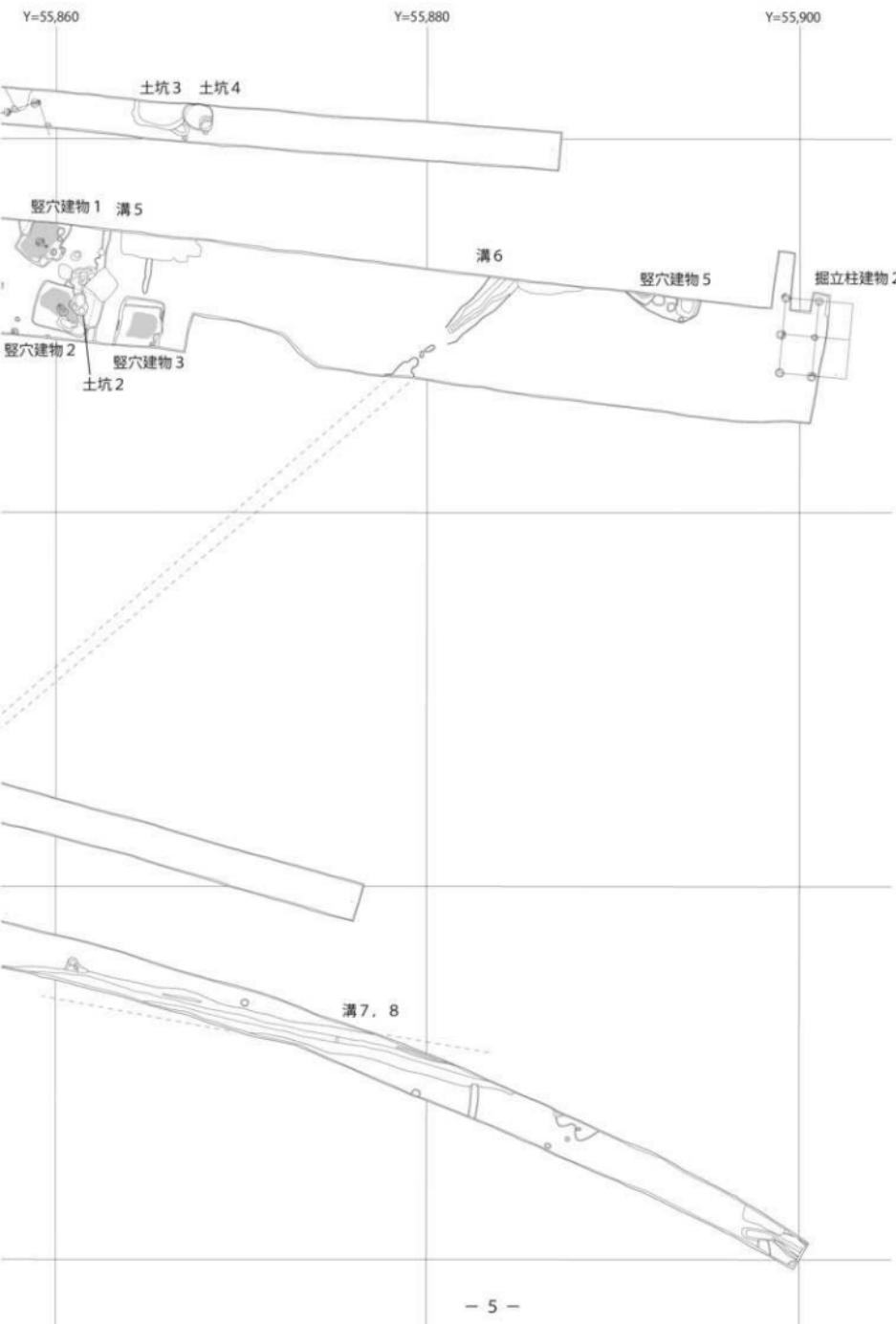
溝 4

溝 6



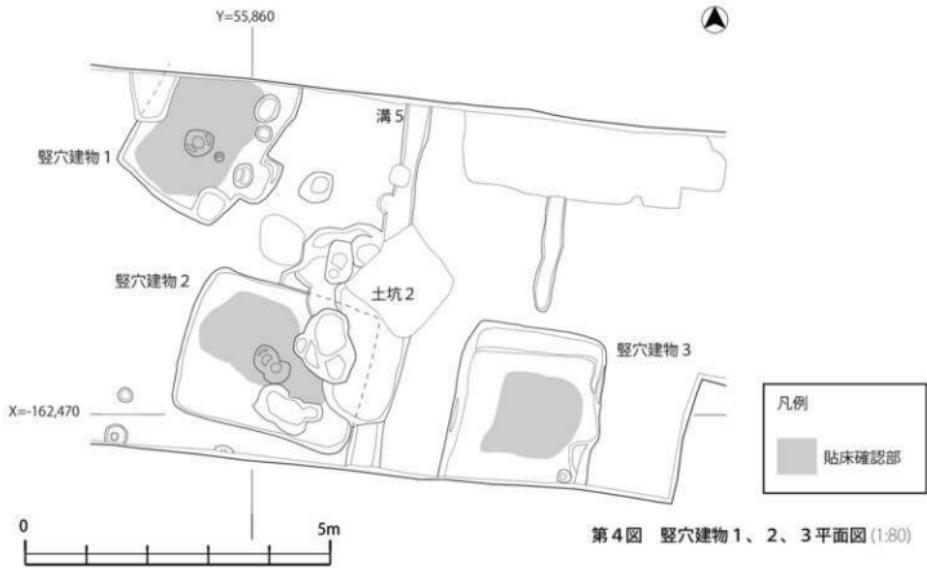
第3図 第16次調査遺構平面図(1:250)

X=-162,520



スを設けている。カマドは確認されない。主柱穴については、確認されなかった。竪穴建物底部では、中央部に約4～30cmの貼床があり、他の竪穴建物と異なり、中央を土坑のように、一度掘りくぼめてから土を入れ、上面を固く叩き締めている状況であった。また、貼床を除去してから主柱穴を再確認したが、確認はされなかった。

遺物については、北側の棚状テラス床面から、杯が3つ重なった状態で出土した。土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。

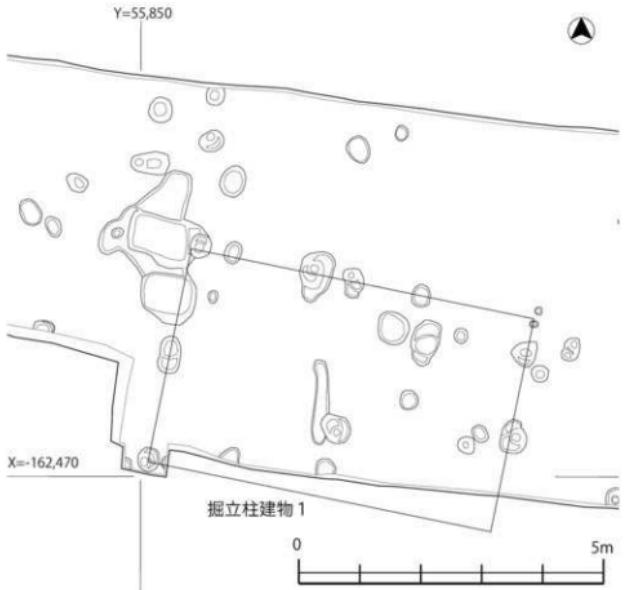


第4図 竪穴建物1、2、3平面図(1:80)

掘立柱建物1

本調査区中央部に位置し、北東側の柱穴が後世の擾乱により破壊されており、底部のみ残存している状況であった。また南側が調査区外に延びているが、南西の柱穴を確認したため、仮に3間×2間の東西棟として復元し、棟方向は、N12度Eである。柱間は1.8～2mで、柱掘方は径0.4～0.6mの梢円形で、深さは0.2～0.6mである。

遺物は少ないが、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。



第5図 掘立柱建物1平面図(1:80)

竪穴建物 4

試掘坑 1 の西部に位置し、東側のほとんどが後世の攢乱により破壊されており、北側の半分ほどが調査区外に延びている。N 3 度 E で、長軸は不明、東西長は約 2.5m である。確認した深さは検出面から 0.2m で、カマド、主柱穴、貼床については、確認されなかった。

遺物は少ないが、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。

掘立柱建物 3

試掘坑 1 の西部に位置し、ほとんどが調査区外に延びており、棟方向は、N 16 度 W であるが、建物の構造は不明である。柱間は 1.4 ~ 1.5m で、柱掘方は径 0.3 ~ 0.4m の楕円形を呈し、深さは 0.1 ~ 0.4m である。

遺物は少ないが、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。

竪穴建物 5

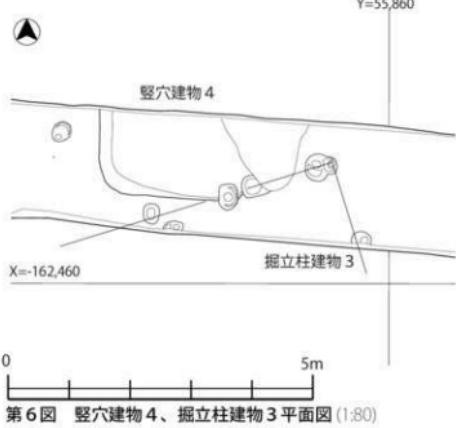
本調査区東部に位置し、ほとんどが調査区外に延びているため詳細は明らかではない。長軸は不明だが、検出の東西長は約 1.3m である。確認した深さは検出面から 0.1m で、カマド、主柱穴は確認されなかった。建物底部で約 4cm の貼床があり、一度掘りくぼめて土を入れ、固く叩き締めている状況であった。

遺物は少ないが、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。

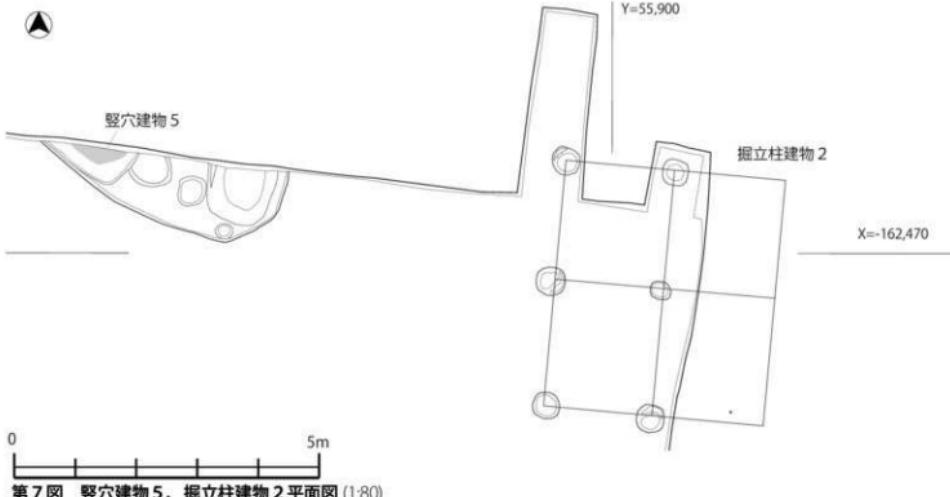
掘立柱建物 2

本調査区東部に位置し、東側が調査区外に延びているが、仮に 2 間 × 2 間の総柱建物として復元した。棟方向は、N 6 度 E である。柱間は南北が 2m で、東西は 1.8m で、柱掘方は径 0.4 ~ 0.5m の楕円形で、深さは 0.3 ~ 0.4m である。

遺物は少ないが、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。



第6図 竪穴建物 4、掘立柱建物 3 平面図 (1:80)



第7図 竪穴建物 5、掘立柱建物 2 平面図 (1:80)

4. その他の遺構

溝 2、3

本調査区南西部から西部にかけて位置し、調査区外にも延びていく溝で、ほとんどが調査区外となり、分断されているが、溝 2、3 は同一の溝と考えられ、延長は 25m 以上となる。溝方向は N28 度 E で、幅は 1.2 ~ 1.5m あり、断面は逆台形で、深さは 0.4m である。地山の検出面の標高値は南から北に下っているが、溝底の深さも南から北に 15 cm 下っているため、溝は南から北に流れていたものと考えられる。

遺物は少ないが、土器の特徴から、中世前半に属すると考えられる。

溝 6

本調査区東部、南部、試掘坑 2 で断続的に確認し、調査区外にも延びていく溝で、ほとんどが調査区外となつたが、延長は 41m 以上となる。溝方向は N48 度 E で、幅は 0.6 ~ 1.5m あり、断面は逆台形で、深さは 0.1 ~ 0.2m である。地山の検出面の標高値は南西から北東に下っているが、溝底の深さも南西から北東に 21 cm 下っているため、溝は南西から北東に流れていたものと考えられる。また、南西部と北東部では、埋土が大きく異なつてあり、南西部は通常のシルト質であったが、北東部は、中～粗砂、シルト、粘土が混じった土質となっており、自然流路に近い堆積であるように考えられる。

遺物は本調査区東部で多く出土し、土器の特徴から、奈良時代後期に属すると考えられる。

溝 8

本調査区南東部で確認し、調査区外にも延びていく溝で、延長は 28m 以上となる。溝方向は N77 度 W で、幅は 0.6 ~ 1.5m あり、断面は逆台形で、深さは 0.4 ~ 0.5m である。地山の検出面の標高値は西から東に下っているが、溝底の深さも南西から北東に 19 cm 下っているため、溝は西から東に流れていたものと考えられる。

遺物は少ないが、土器の特徴から、平安時代に属すると考えられる。

5.まとめ

第 16 次調査は、露越遺跡の中でも西端部で初めて面的に実施した調査となった。調査の結果、奈良時代後期に属する竪穴建物 5 棟や掘立柱建物 3 棟などを確認でき、史跡斎宮跡の南側にも古代の集落が広がることを確認できたことが大きな成果といえる。

調査地点周辺の過去の調査結果にも着目すると、西側の宇田遺跡では 4 間 × 2 間の掘立柱建物や 2 間 × 2 間の総柱建物 2 棟が見つかっている。また、金剛坂遺跡（第 20 次調査）では奈良時代後期の竪穴建物 12 棟や掘立柱建物 5 棟が見つかっており、その内 2 棟は総柱建物である。斎宮跡を含めた周辺の同時期における竪穴建物の分布傾向を集成すると、史跡範囲の南側のみならず史跡内においても斎宮の中心区画の周辺に点在している状況が看取できる。一方、今回の調査地点も含めて周辺遺跡で見つかっている遺構の時期は、奈良時代後期に限定されることも特徴である。このことは、光仁朝の酒人内親王の時期に、斎宮跡において史跡西部の竹川中垣内地区の奈良時代の正方位区画から史跡東部の鍛冶山西区画に斎宮の区画が遷ることなどとの関係を考える必要があるといえる。奈良時代後期に斎宮造営に関わる出来事として、『続日本紀』の記事に宝亀 2 年（771）に氣太王が斎宮造営のために伊勢に派遣されたことや延暦 4 年（785）に紀作良が造斎宮長官に任命されていることが見られる。

今回の調査成果は、斎宮跡周辺において奈良時代後期というごく限られた時期に、集落の出現と消長があつたことの一端を示しており、こうした動向は斎宮の変遷という大きな画期の中で史跡周辺の様相がどのようなものであったかを知る大きな手がかりになったといえる。今後も、周辺での調査が進展し、さらなる解明がなされることを期待したい。

<写真図版>



写真図版1 ドローン撮影による調査区全景※撮影は明和町役場AIRISの協力を得て実施した。



写真図版2 竪穴建物1（西から）



写真図版3 掘立柱建物1（南から）



写真図版4 竪穴建物2（南から）



写真図版5 竪穴建物2（南から）



写真図版 6 竪穴建物 3 検出状況（南から）



写真図版 7 竪穴建物 3 掘削状況（南から）



写真図版 8 竪穴建物 3 土器出土状況



写真図版 9 竪穴建物 3 完掘状況（南から）



写真図版 10 掘立柱建物 2（南から）



写真図版 11 竪穴建物 4、掘立柱建物 3（北東から）



写真図版 12 発掘作業状況（竪穴建物 1周辺）



写真図版 13 满4 土器出土状況（北から）

＜第 17 次調査＞

【調査主体】：明和町斎宮跡・文化観光課文化財係

【調査期間】：令和 3 年（2021）12 月 13 日～令和 4 年（2022）3 月 31 日

【調査面積】：本調査：650 m²

6. 遺構

第 1 節 調査前の状況と調査区の設定

調査地の標高は 13m 前後で、西側で実施した第 16 次調査よりも 1m ほど低い。調査前までは斎宮幼稚園の駐車場として利用されており碎石と山砂により盛土がなされていた。盛土は調査区の北側では約 0.1m であるが、南に向かうにしたがって厚くなる傾向で、調査区の南東隅部分では約 0.4m 以上ある。

前述したように、本調査地点は駐車場造成に先立って平成 20 年度に第 4 次調査を実施している。調査は試掘調査として行われ、敷地内に 4 × 4 m の 8ヶ所の試掘坑が設定された。調査では溝や井戸（未掘）などの遺構が見つかっているが、敷地の南側と東側の試掘坑では遺構が見つかっておらず、遺構密度としては散漫な状況であった。

今回の調査は、幼稚園が建設される部分と建物に伴う浄化槽埋設部分を調査区として設定した。

第 2 節 遺構

調査はまず重機によって表土の除却を行った。遺構検出面は現況の地表面から概ね 0.3m ~ 0.4m である。地山は暗灰黄色シルトで、第 16 次調査地点と同様に地山の色が暗い傾向であった。重機掘削の時点で、調査区の東部及び南部の大半の地点で現代の廃棄物が混入していた。試掘調査の情報などから搅乱を受けていると判断し、重機によって搅乱土の大半を除却した上で、人力による掘削作業に移行した。

調査の結果、土坑 2 基、溝 6 条、複数のピットを確認した。以下、主な遺構について報告する。

土坑 1

調査区の北側中央付近で検出した。西側の掘り方の一部は搅乱により切られている。遺構の平面プランは不整形ではあるが隅丸方形を呈し、0.45m × 0.45m ほどで、深さは遺構検出面から 0.35m である。土坑の中央部は一段深く掘り下げられており、その部分に、土師器の甕が正立した状態で据えられ、その上に土師器の杯が裏返しに蓋をするような状態で検出された。甕の内部には内容物はなかった。何らかの儀礼的な意図をもって埋納されたものと考えられるが、詳細は判断しがたい。出土土器は斎宮編年の 1~3 期にあたり、奈良時代後期に属すものと思われる。

土坑出土の土器の内、甕の内容物について、一般社団法人文化財科学研究センターの金原正子氏にご協力いただき、甕内部の付着物をピンセットで採取し花粉分析を行った。しかし、花粉はほとんど検出されず、分析の報告として、甕の内部からは花や種実や穎などの植物部位やシダ植物は含まれず、また大型珪藻なども含まれていなかつた。そのため、土坑への土器の埋納時には植物や何らかの水は入れられていなかつたものと推定されるとの結果を得た。

土坑 2

調査区東南部で、搅乱土を除却して検出した。遺構の平面プランは円形を呈し、直径 1.3m ほどの規模である。当初井戸の可能性も考えたが、深さは遺構検出面から約 0.9m で地山に達し、土坑と判断した。検出面では、中央部に握り拳大の礫が集積されるような状況がみられた。底部は東側により一段深くなっている。

土坑からは山茶碗や伊勢鍋、皿などが出土し、山茶碗の内部底面は平滑になっておりわずかに墨痕が認められた。これらの遺物から遺構の時期は 12 世紀末から 13 世紀初頭に属すものと思われる。

溝 1

調査区の西部で南北方向に延びる溝である。調査区内だけでも、延長約 21m を確認し、ほぼ直線的に延びている。溝の幅は約 1.0m、遺構検出からの深さは約 0.5m で、南方向に向かって深くなる。

溝からは山茶椀や土師器の皿、鍋のほか砥石が出土している。時期に幅があるものの、出土遺物からおおむね 12 世紀中頃から 13 世紀中頃に属すものと考えられる。

X=-162460

Y=56000

Y=56020

X=-162480



0 10m
第8図 第17次調査遺構平面図 (1:150)

X=-162500

Y=56040



写真図版 14 ドローン撮影による調査区付近遠景

溝4

調査区の東部で検出した溝である。途中を後世の搅乱で壊されているが、南側で溝の一部が確認でき、南北方向に延びるものと思われる。溝の幅は約0.3m、深さは遺構検出面から約0.15mで、ほぼ一定の深さである。

溝からは山茶碗などが出土しており、おおむね12世紀末から13世紀初頭に属するものと考えられる。

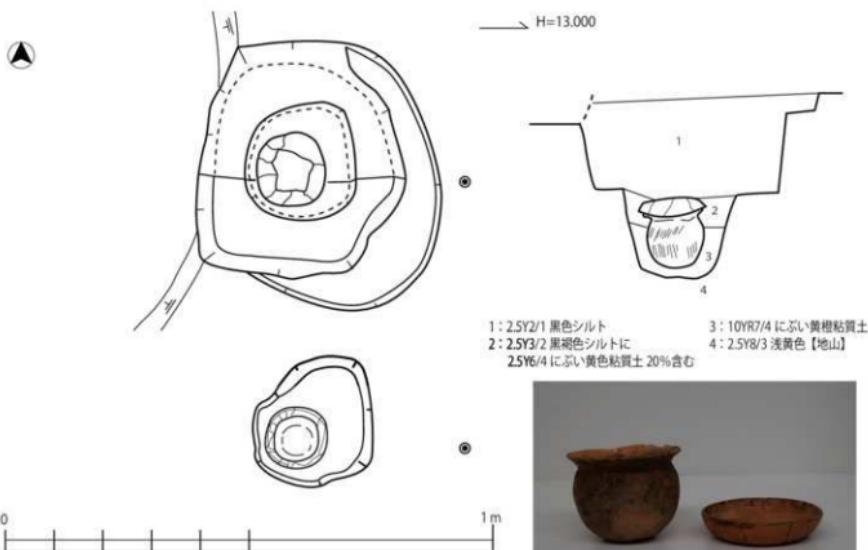
溝2、溝3、溝5、溝6からは出土遺物が少量もしくはなかったため時期決定はしがたい。

7.まとめ

第17次調査では、露越遺跡の中央部での面的な調査となつたものの、後世の削平を大規模に受けており、遺構の確認ができたのは調査範囲の半分程度となった。削平を受けていない部分についても、遺構の密度や出土遺物の量は少なく、遺跡の分布としては薄いものであった。

その中で、土坑1で確認された土師器の埋納状況は注目される。時期は奈良時代後期に属するが、今回の調査で同時期に属する他の遺構はない。出土した遺物についても、包含層出土のものを含めても奈良時代に属するものは少ない。前述のように、調査区の多くが搅乱を受けているため、面的な広がりは断定しにくいものの、土坑1だけが単独で存在するような状況である。そのため、建物建設に伴う地鎮や胞衣壺という可能性も考えられるが、出土した甕には内容物がなく遺構の性格を導き出すことは難しい。一つの可能性として、調査地点の北側は史跡斎宮跡の南限付近にあたり、西側は第16次調査で一時的ではあるが居住域が存在していたことがわかった。一方、調査地点の東側は、標高が1mほど低い氾濫平野が広がり、条里制地割の痕跡が残っていることから、水田として利用されていたものと考えられる。こうした周辺の状況から、調査地点付近が奈良時代後期の時点での生活域と生産域の境界と認識されており、何らかの境界における祭祀が行われたのかもしれない。

調査で検出された溝については、時期を特定できないものもあるが、溝1はN7度E、溝4・6はN12~13度E振れて掘られている。中世段階に区画を画する意図をもって敷設されたものかもしれない。今後の周辺の調査の充実を待ちたい。



第9図 土坑1検出時平面図(1:10)

(※上：土師器皿検出時、下：土師器皿取上げ後、甕検出時)

写真図版15 土坑1出土の甕および杯

<写真図版>



写真図版 16 ドローン撮影による調査区全景



写真図版 17 調査区全景（南東から）



写真図版 18 調査区全景（北西から）



写真図版 19 溝1（北から）



写真図版 20 土坑2検出状況（南から）



写真図版 21 土坑1完掘状況（南から）



写真図版 22 土坑1埋納状況



写真図版 23 土坑1埋納状況（※杯取上げ後）

報告書抄録

ふりがな	つゆこしいせきだいじゅうろくじだいじゅうななじはくつちょうさがいよう										
書名	露越遺跡第16次、第17次発掘調査概要										
副書名											
卷次											
シリーズ名											
シリーズ番号											
編著者名	乾 哲也、味噌井 拓志										
編集機関	明和町（斎宮跡・文化観光課）										
所在地	〒515-0332 三重県多気郡明和町大字馬之上945番地 Tel 0596(5)217126										
発行年月日	西暦2023年3月10日										
第16次調査											
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因				
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °'	° °'						
露越遺跡	三重県多気郡明和町大字竹川字南裏	24442	207	34° 32° 02°	136° 36° 37°	2021.10.11 ～2022.2.15	1,100	宅地造成			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項							
集落	奈良時代	堅穴建物、掘立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵器								
要約											
遺跡の西部で調査を実施し、奈良時代後期に属する堅穴建物および掘立柱建物などを複数確認した。遺跡は史跡斎宮跡の指定範囲南側に位置し、斎宮跡の中核区画が変遷する時期に周辺の遺跡がどのような様相を呈していたかを知るための貴重な成果を上げることができた。											
第17次調査											
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因				
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °'	° °'						
露越遺跡	三重県多気郡明和町大字竹川字南裏	24442	207	34° 32° 02°	136° 36° 37°	2021.12.13 ～2022.3.31	650	幼稚園建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項							
集落	奈良時代、中世	土坑、溝	土師器、須恵器、陶器、石製品	埋納遺構							
要約											
遺跡の中央部で調査を実施し、奈良時代後期の埋納遺構や中世の溝などを確認した。											

< 凡例 >

1. 測量にあたっては、世界測地系第VI座標系を基準とした。
2. 本書での報告内容はあくまで概要であり、今後の検討の結果によって内容が変更される可能性がある。
3. 本書に掲載した遺構平面図は完掘状態で図化したものであり、遺構の新旧関係と平面図が対応していない部分がある。
4. 遺物の時期区分は、斎宮歴史博物館2019「斎宮跡発掘調査報告 II 柳原区画の調査出土遺物編」に掲げる。
5. 土層の色調は、日本色研事業事業株式会社発行『新版標準土色貼』2004に掲げる。
6. 写真回版でドローン撮影としたものは、明和町役場AIRISによるものである。

< 謝辞 >

現地での発掘調査に際しては、開発申請者である株式会社池田建設（第16次）および社会福祉法人豊津児童福祉会（第17次）からご理解とご協力をいただいた。土坑出土の甕の内容物の分析について、一般社団法人文化財科学研究センターの金原正子氏にご協力いただき、貴重な知見を得ることができた。また、下記の方々から現地での調査等でご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい（敬称略・組織名は当時）。

大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・小原雄也（斎宮歴史博物館）、高松雅文（三重県埋蔵文化財センター）

露越遺跡第16次、第17次発掘調査概要

令和5年（2023）3月10日

編集・発行：明和町

印刷：光出版印刷株式会社